

1. 略歴

1982年3月	東京大学文学部国語学専修課程卒業
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科研究生
1985年10月	防衛大学校人文科学研究室助手
1989年4月	山梨大学教育学部専任講師
1991年4月	山梨大学教育学部助教授
1992年4月	成蹊大学文学部日本文学科助教授
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本語・日本文学）
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授（日本語・日本文学）
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本語・日本文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語学 日本語文法・日本語文法学史および言語理論

b 研究課題

現代語・古典語の日本語文法あるいは日本語文法学史および言語理論の研究をテーマとしている。なかでも現代語日本語文法に関する研究を一貫して続けており、これまでに、格構造（受身文、使役文、可能文、授受動詞構文）、テンス・アスペクト構造、言語行為構造（推量文、疑問文）、談話構造、中でも情報構造・視点構造（テンス、授受動詞構文）・期待構造（否定文、数量詞、限定表現、条件文）など、日本語文法をできる限りグローバルにとらえられる枠組を求めて考察を進めてきた。

さらに現代語の成果を古典語に適用して、古典語文法に新たな方向からアプローチをするとともに、従来の文法研究を歴史的にとらえることによって、各時代の文法理論を相対化することも試みている。言語理論に関しては、コミュニケーション行為構造の分析に力点を置きつつ、近年の有力な言語理論の批判的検討を通して、理論的全体像を模索している。

c 概要と自己評価

最近10年あまり特に力を入れて進めてきたことは、古典語のテンス・アスペクトに関して、これまでの研究史を概観し、その上に立ってこれまでの研究成果を包括的に説明できる理論的枠組を構築することであり、それは博士論文としてまとめた上で、それに推敲を重ね、『中古語過去・完了表現の研究』として出版することができた。現在では、テンス・アスペクトに続き、古典語の推量表現について研究を進めている。

またそれと平行して、現代語に関しては、ノダ・ワケダ・モノダ・コトダなどの形式名詞述語文、あるいは最近はとりたてて詞と呼ばれることの多い副助詞、また否定文に関して研究を進めており、近い将来それぞれ単著としてまとめるつもりである。

さらにこれまであまり解明が進んでいない近世・近代の文法研究についても、数百点に及ぶ文献を収集し、それをもとに文法的な認識のあり方の変遷という観点から、分析を始めた。それぞれの時代の研究者が、どのような認識的な枠組のなかで研究をしてきたのか、そしてその枠組がどのようなきっかけで大きく方向を変えたのかなどを、実証的にたどっていきたい。

言語理論に関しても、特にグライスに端を発する研究の流れと広がりについて、批判的な究明を進めており、これもある程度全体像が見えてきた段階で、単著としてまとめた。

d 主要業績

(1) 論文

- 井島正博、「動詞基本形をめぐる問題」、『日本語文法』、第14巻第2号、pp.34-49、2014.10
- 井島正博、「トコロ文の構造と機能」、『日本語学論集』、第11号、pp.97-136、2015.3
- 井島正博、「過去・完了の助動詞」、『品詞別 学校文法講座 第6巻 助動詞』、pp.120~152、2016.1
- 井島正博、「モノダ文の周辺」、『日本語学論集』、第12号、pp.18~52、2016.3

(2) 学会発表

国内、井島正博、「上代・中古語の推量表現に関する一考察—特にベシをめぐって—」、早稲田大学日本語学会、早稲田大学、2014.12.6

国内、井島正博、「ソーシャルと日本語研究」、日本言語学会第151回大会公開シンポジウム「ソーシャルと日本語研究」、名古屋大学、2015.11.29

(3) 事典項目

井島正博、「否定文」「文の成分」「代名詞」「提示語」「並列語」「注釈語」、『日本語文法事典』、大修館書店、2014.8

井島正博、「助詞史」「名詞」「名詞文」「終助詞」「間投助詞」、『日本語大事典』、朝倉書店、2014.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本語文法学会、大会委員長、2013.4～2016.3